

[B年] 受難節第3主日(2022年3月20日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 48章1~8節**

- 1 ヤコブの家よ、これを聞け。
ユダの水に源を發し
イスラエルの名をもって呼ばれる者よ。
まこともなく、恵みの業をすることもないのに
主の名をもって誓い
イスラエルの神の名を唱える者よ。
- 2 聖なる都に属する者と称され
その御名を万軍の主と呼ぶイスラエルの神に
依りすがる者よ。
- 3 初めからのことをわたしは既に告げてきた。
わたしの口から出た事をわたしは知らせた。
突如、わたしは事を起こし、それは実現した。
- 4 お前が頑固で、鉄の首筋をもち
青銅の額をもつことを知っているから
- 5 わたしはお前に昔から知らせ
事が起こる前に告げておいた。
これらのことを起こしたのは、わたしの偶像だ
これを命じたのは、わたしの木像と銅像だ
お前に言わせないためだ。
- 6 お前の聞いていたこと、そのすべての事を見よ。
自分でもそれを告げうるではないか。
これから起こる新しいことを知らせよう
隠されていたこと、お前の知らぬことを。
- 7 それは今、創造された。
昔にはなかったもの、昨日もなかったこと。
それをお前に聞かせたことはない。
見よ、わたしは知っていたと
お前に言わせないためだ。
- 8 お前は聞いたこともなく、知ってもおらず
耳も開かれたことはなかった。
お前は裏切りを重ねる者
生まれたときから背く者と呼ばれていることを
わたしは知っていたから。

【使徒書日課】 テモテへの手紙二 1章8~14節

- 8だから、わたしたちの主を証しすることも、わたしが主の囚人であることも恥じてはなりません。
むしろ、神の力に支えられて、福音のためにわたしと共に苦しみを忍んでください。⁹神がわたした

ちを救い、聖なる招きによって呼び出してください。わたしたちの行いによるのではなく、御自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにおいてわたしたちのために与えられ、¹⁰今や、わたしたちの救い主キリスト・イエスの出現によって明らかにされたものです。キリストは死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現してくださいました。¹¹この福音のために、わたしは宣教者、使徒、教師に任命されました。¹²そのために、わたしはこのように苦しみを受けているのですが、それを恥じていません。というのは、わたしは自分が信頼している方を知っており、わたしにゆだねられているものを、その方がかの日まで守ることがおできになると確信しているからです。¹³キリスト・イエスによって与えられる信仰と愛をもって、わたしから聞いた健全な言葉を手本としなさい。¹⁴あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によって守りなさい。

【福音書日課】 マルコによる福音書 8章27~33節

²⁷イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。²⁸弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」²⁹そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」³⁰するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

³¹それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。³²しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。³³イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

イザヤ書 48章1～8節

- 1 ヤコブの家よ、このことを聞け。
 イスラエルの名で呼ばれ
 ユダの流れを汲む者よ。
 主の名によって誓い
 イスラエルの神の名を唱えるが
 真実もなく、正義もなくそれをなす者よ。
- 2 彼らは聖なる都の者と名乗り
 万軍の主の名を持つイスラエルの神に
 依りすがっている。
- 3 先にあったことを私は昔から告げてきた。
 それは私の口から出て、それを聞かせた。
 突然私は実行に移し、それは実現した。
- 4 あなたがかたくなで
 首が鉄の筋、額が青銅であるのを
 私は知っていたので
- 5 私は昔からあなたに告げ
 それが起こる前から告げていた。
 「私の偶像がこれらを行った」とか
 「私の彫像や鑄造がこれらを命じた」などと
 言わせないためだ。
- 6 あなたが聞いた、そのすべてを見よ。
 あなたがたは告げようとしないのか。
 これから私が新しいことを聞かせよう
 あなたの知らない秘められたことを。
- 7 それは今創造された。
 昔からあったことではない。
 今日まで、あなたはこれを聞いたことはない。
 「私それを知っていた」などと
 あなたに言わせないためだ。
- 8 あなたは聞いたこともなく、
 知ってもいなかった。
 あなたの耳はずっと前から開かれていなかった。
 あなたが必ず裏切ることを
 母の胎にいる時から背く者と呼ばれていたことを
 私は知っていたから。

テモテへの手紙二 1章8～14節

8ですから、私たちの主を証することや、私が主の囚人であることを恥じてはなりません。むしろ、

神の力に支えられて、福音のために、苦しみを共にしてください。⁹神が私たちを救い、聖なる招きによって呼び出してくださったのは、私たちの行いによるのではなく、ご自身の計画と恵みによるのです。この恵みは、永遠の昔にキリスト・イエスにあって私たちに与えられ、¹⁰今や、私たちの救い主キリスト・イエスが現れたことで明らかにされたものです。キリストは死を無力にし、福音によって命と不死とを明らかに示してくださいました。¹¹この福音のために、私は宣教者、使徒、教師に任命されました。¹²そのために、私はこのように苦しみを受けているのですが、それを恥じてはいません。私は自分が信じてきた方を知っており、私に委ねられたものを、その方がかの日まで守ることがおできになると確信しているからです。¹³キリスト・イエスにある信仰と愛をもって、私から聞いた健全な言葉を手本としなさい。¹⁴あなたに委ねられた良いものを、私たちの内に宿っている聖霊によって守りなさい。

マルコによる福音書 8章27～33節

²⁷イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリアの村々へ出かけられた。その途中、弟子たちに、「人々は、私のことを何者だと言っているか」とお尋ねになった。²⁸弟子たちは言った。「洗礼者ヨハネだと言っています。ほかに、エリヤだと言う人、ほかに、預言者の一人だと言う人もいます。」²⁹そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたは私を何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」³⁰イエスは、ご自分のことを誰にも話さないようにと弟子たちを戒められた。

³¹それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちによって排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。³²しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスを脇へお連れして、いさめ始めた。³³イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている。」

黙想のためのノート**次主日教会暦と聖書日課について**

・3月20日「受難節第3主日」の日課主題は「受難の予告」。主イエスの「受難物語伝承」は、「棕櫚の主日」に記念される「エルサレム入城」の出来事から始まる一週間（「受難週」「聖週間」）の出来事として知られるが、「福音書」は、「エルサレム入城」以前に複数回、主イエスが「受難予告」されていたことを前日譚として伝えている。「受難予告」伝承は、十字架刑による死と葬りおよび復活という出来事についての予告であると同時に、その意義を弟子たちに提示する性格をもった事柄として物語られている。

・福音書日課は、「マルコ福音書」から、最初の「受難予告」を物語る箇所。旧約聖書日課は、「イザヤ書」から、バビロンに捕囚民として在する「ヤコブの家」に解放と帰郷の希望を告げる預言の箇所。使徒書日課は、「テモテへの手紙二」から、使徒パウロが自身に託された使命を語りつつ、これを模範として伝道者としての務めに励むよう勧める箇所。

旧約日課(イザヤ 48章より)

・「イザヤ書」は、旧約・三大預言書の一つで、ユダヤ正典「後の預言者」の第一に置かれ、「前の預言者」と「後の預言者」を結びつける要として位置づけられる。前半(～39章)までと後半(40章～)で区別され、前者は「第一イザヤ」、後者は「第二イザヤ」と呼ばれることもある。「第一イザヤ」は、前8世紀末に南王国の宮廷預言者として活動した歴史上の人物・エルサレム神殿祭司イザヤの預言集と預言活動の記録。「第二イザヤ」は、前6世紀中ごろ、バビロニアによって滅亡した南王国がペルシアの勃興によって捕囚を解かれユダヤに帰還し民族自治に向けた事業に着手することになった時期に、イザヤ以来の預言者の伝統を継承することを自認する祭司・預言者集団によって告げられた預言の集成と考えられる。56章以下を「第三イザヤ」として区別する学者もいるが、正典編集・編纂において一体化されたものである以上、分けて異なる著者を想定するような解釈がされる必然性はない。

・「第二イザヤ」は、内容から三つに区分(40～48章、49～55章、56～66章)して扱われるのが一般的である、第一の区分(40～48章)は、もっぱらバビロンに在する捕囚の民に向けて解放とユダヤ帰還に対する希望を告げる。第二の区分(49～55章)は、捕囚からの解放によって現実に始まりつつある帰還事業への参与を促す。第三の区分(56章以下)は、帰還事業の完成によって将来もたらされるであろう終末的希望を告げている。日課箇所は、第一の区分の終わりに相当し、内容的には第二の区分への移行が見られる。

・日課箇所冒頭の「ヤコブの家」は、「イザヤ書」中9例見られる表現で、6例は「第一イザヤ」中に見られる。「第一イザヤ」で「ヤコブの家」は、もっぱら滅びゆく北王国を指していると考えられる。しかし、「第二イザヤ」では、その後滅んだ南王国も北王国と重ね合わせ

て語られている。一方、「イスラエル」の呼び名は、元来「ヤコブの家」と同様に北王国の呼称であるが、「第一イザヤ」では南王国も含めた呼び名として用いられることがある。「第一イザヤ」の預言者イザヤの時代、滅亡した北王国からは亡命者や難民が南王国社会に加わっていたと推認され、その中には北王国で宮廷預言者として活動していたホセアのような人物も含まれていたと考えられる。彼らが北から逃れてきたことによって、南王国には北の伝承・伝統がもたらされ、滅んでしまった北王国イスラエルの継承者を自認する思想が生じたのだろう。それが、「第一イザヤ」の預言には反映されていると考えられる。この南王国がイスラエル再興の担い手となるという思想は、その数世代後のヨシヤ王時代の改革における「大イスラエル主義」を生み出す源泉となったのである。ヨシヤ王の「大イスラエル主義」に基づく改革は途中で挫折し、結局王国は滅亡してしまうが、この「大イスラエル主義」の思想的系譜を継承した預言者エレミヤおよびその後継者らによって、バビロン捕囚時代を超えて、正典「律法と預言者」の編集編纂が担われたと考えられる。

使徒書日課(Ⅱテモテ 1章より)

・以上を踏まえて日課箇所を黙想すると、「ヤコブの家」等の呼び名をもって告げられる預言には、かつての北王国滅亡の古い記憶と、その後の南王国滅亡の比較的新しい記憶、などを重層的に呼び覚ます意図が認められるであろう。

・「テモテへの手紙二」は、使徒パウロが伝道の協力者であるテモテに宛てて伝道者としての心得を遺訓として記したもとのまとめられた書簡文書。「テモテへの手紙一」および「テトスへの手紙」と共に「牧会書簡」とまとめて扱われることが一般であるが、これらは、現代の歴史批判的聖書解釈の立場では、パウロの真筆ではなく彼の意を汲んだ後継者による偽書とされることが通例となっている。古代教会では、「パウロ書簡集」に欠けている例も見られるが、2世紀後半にはパウロ書簡として引用する教父文書があり、パウロの真筆性が疑われた形跡はほとんどない。

・日課箇所は、前段(3～7節)でパウロがテモテ個人の信仰者としての姿をどのように見ているかを記したのに続いて、今度はパウロ自身の伝道者としてあり様を証しし、テモテもその生き方に倣う者になるようにと勧めている。テモテは、母および祖母から信仰を受け継いだとされているが(5節)、「使徒言行録」によると、リストラ・イコニオン地方の教会共同体で評判となっていた彼をパウロが自身の宣教団に勧誘したこととなっている(使徒 16:1 以下)。父親がギリシア人で、パウロ宣教団に加わるまで未割礼であったが、パウロは彼に割礼を受けさせている。

・パウロは伝道者としての自己意識として「囚人(デスマイオス)」と称する例は、「エフェソ書」(3:1、4:1)、「フィレモン書」(1節、9節)にも見られるが、「僕・奴隷(ドゥーロス)」を用いる例のほうが多い。

福音書日課(マルコ 8 章より)

・日課箇所は、「ペトロの信仰告白」から「受難予告」へと続く一連の場面の一部。この一連の場面は、共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)で共通に伝えられており、基本的な構成は一致している。すなわち、①主イエスから弟子たちに対して人々のイエスに対する認識が問われ、続いて同じ問いが弟子たちに向けられた結果、ペトロが代表して証言(信仰告白)する。②主イエスがご自身の受難と復活を予告される。③弟子たちに対してイエスに従う者のあり方が「自分を捨て、十字架を背負って従う」という表象で教えられる。という三部構成となっている。さらに、これらに「山上の変貌」の伝承が続けられるのが、共観福音書に共通の校正となっている。

・共観福音書の比較においてマルコに特有の記述箇所は、多くはないが特徴的なものとして挙げられる(以下、③以降は日課箇所からは外れる)。①32 節「しかも、そのことをはっきりとお話しになった」は、主イエスの受難予告発言を弟子たちが明瞭に聞き、受けとめたことを敢えて強調する記述となっている。②33 節「弟子たちを見ながら…叱って」は、主イエスのペトロに対する叱責が、二人だけの間で起こったこととしてではなく、弟子たちも目撃した出来事であったことを示そうとしている。③34 節「群衆を…共に呼び寄せて」は、主イエスに従う者に対する「自分を捨て、自分の十字架を背負って」の呼びかけが、弟子たちのみならずすべての者に向けられたものであることを示そうとしている。④35 節「また福音のために」は、マルコに固有の「福音宣教」観の強調となっている。⑤38 節「神に背いたこの罪深い時代に」は、マタイ(16:4)とルカ(11:29)が「ヨナのしるし」に関する逸話の中で伝える句節であるが、マルコはここに置いている。マルコは「ヨナのしるし」を伝えていない。

・28 節「エリヤ」は、旧約の預言者(王上 17 章～王下 2 章)。後段「山上の変貌」の後半で「再来のエリヤ」が取り上げられ、洗礼者ヨハネと同定されている。

・29 節「メシア」の原文ギリシア語は「キリストス」。

・33 節「サタン、引き下がれ(ヒュパゲ・オピソ・ムー・サタナ)」の直訳は「わたしの後ろを行け、サタン」。

来週の誕生日 (3 月 20 日～27 日)

。

主日礼拝の讃美歌から

・21-543 番「キリストの前に」(歌詞＝ I 537「わが主のみまえに」)は、1881 年版『讃美歌』編纂に際して奥野昌綱が作詞、当初は「しずけき祈りの」(21-495 番)の曲、1903 年版『讃美歌』からは「わが主のみまえに」(I-537 番)の曲で歌われてきたものだが、『讃美歌 21』編纂に際して大幅に改作した歌詞に高浪晋一が新しい曲をつけた。

・21-515 番「きみのたまものと」(＝ II 188)は、19-20 世紀米国バプテスト派牧師で大学教員など教育畑

で活動したグロースの作詞。曲は 19 世紀英国の女性ピアニスト・バーナードの作曲。

・21-527 番「み神のみわざは」(＝ I 80)は、17 世紀ドイツのギムナジウム教師ザムエル・ロディガストが親交のあった教会歌手セヴェルス・ガストリウスのために作詞、ガストリウスが曲を付けて歌われるようになり、讃美歌集に収められるようになった。このコーラルに基づいてバッハもカンタータを作曲している。

21-515「きみのたまものと」**Give of your best to the Master**

1. Give of your best to the Master, / Give of the strength of your youth; / Throw your soul's fresh, glowing ardor / Into the battle for truth. / Jesus has set the example, / Dauntless was He, young and brave; / Give Him your loyal devotion, / Give Him the best that you have.

Refrain:

Give of your best to the Master; / Give of the strength of your youth, / Clad in salvation's full armor, / Join in the battle for truth.

2. Give of your best to the Master, / Give Him first place in your heart; / Give Him first place in your service, / Consecrate now ev'ry part. / Give and to you shall be given; / God His beloved Son gave; / Gratefully seeking to serve Him, / Give Him the best that you have. [Refrain]

3. Give of your best to the Master, / Naught else is worthy His love; / He gave Himself for your ransom, / Gave up His glory above; / Laid down His life without murmur, / You from sin's ruin to save; / Give Him your heart's adoration, / Give Him the best that you have. [Refrain]

21-527「み神のみわざは」**Was Gott tut, das ist wohlgetan**

1. Was Gott thut, das ist wohlgethan! / es bleibt gerecht sein Wille; / wie er Fängt meine Sachen an, / will ich ihm halten stille; / er ist mein Gott, / der in der Noth / mich wohl weiß zu erhalten, / drum laß ich ihn nur walten.

2. Was Gott thut, das ist wohlgethan! / er wird mich nicht betrügen! / er führet mich auf rechter Bahn, / so laß ich mich begnügen! / an seiner Huld / und hab Geduld, / er wird mein Unglück wenden, / es steht in seinen Händen.

3. Was Gott thut, das ist wohlgethan! / er wird mich wohl bedenken, / er als mein Arzt und Wundermann, / wird mir nicht Gift einschenken / für arzenei: Gott ist getreu, / drum will ich auf ihn bauen / und seiner Güte trauen.

4. Was Gott thut, das ist wohlgethan! / er ist mein Licht und Leben, / der mir nichts Böses gönnen kann; / ich will mich ihm ergeben / in Freud und Leid; / es kommt die Zeit, / da öffentlich erscheinet, / wie treulich er es meinet.

5. Was Gott thut, das ist wohlgethan! / muß ich den Kelch gleich schmecken, / der bitter ist nach meinem Wahn, / laß ich mich doch nicht schrecken, / weil doch zuletzt ich werd ergetzt / mit süßem Trost im Herzen, / da weichen alle Schmerzen.

6. Was Gott thut, das ist wohlgethan! / dabei will ich verbleiben, / es mag mich auf die rauhe Bahn, / Noth, Tod und Elend treiben, / so wird Gott mich / ganz väterlich in seinen Armen halten, / drum laß ich ihn nur walten.